

# “nohting is, but what is not”

—— *Macbeth* —の考察——

山 口 和 世

## 序

*Macbeth* は Shakespeare 悲劇のうちで最も短く、総行数わずか2084行から成っている。*Macbeth* から観客が受ける展開の速さは、主としてこういう外的、物理的理由に因るものであるが、主人公 *Macbeth* の内面に起因しているとも考えられる。実際の、行動的な *Lady Macbeth* に対し、思考から行為への移行が困難であり、内省的で、豊かな *imagination* の持ち主である *Macbeth* の思考形態の特色を探る事によって、そういう *Macbeth* を主人公としたこの劇が我々に *speed* 感を与えるという逆説、及び、その逆説から生じる *Macbeth* の悲劇を考察する事が本稿の目的である。

—

まず *Macbeth* の思考の内部構造をその傍白と独白の中に見てみよう。傍白と独白は一般に登場人物の心理や感情を端的に表現する手段として用いられるものであるが、特に *Macbeth* の独白は意識の流れを表現する一種の内部言語 (*inner speech*) と見做すことができる<sup>1</sup>と指摘されている。魔女の予言を聞いた直後、*Macbeth* は戦場で果した功績に対する恩償として、*Duncan* から *Cawdor* の領主の地位を与えられたという報告を受け取る。ここに魔女の第一の予言が実現したわけである。その時、彼は次のような独白を述べる。ここには大団円に至るまで一貫して見られる *Macbeth* の思考癖が既に現われている。

Two truths are told,  
As happy prologues to the swelling act  
Of the imperial theme. (I. iii. 127-129)

彼は魔女の予言を芝居一現実とは異なる虚構の世界一の *image* で表現している。*Banquo* が現実に立脚点を置いて

The instruments of Darkness tell us truths;  
Win us with honest trifles, to betray's  
In deepest consequence. (I. iii. 124-126)

と述べるのに対し著しい相違を示している。更に続く

This supernatural soliciting  
 Cannot be ill; cannot be good:  
 If ill, why hath it given me earnest of success,  
 Commencing in a truth? I am Thane of Cawdor:  
 If good, why do I yield to that suggestion  
 Whose horrid image doth unfix my hair,  
 And make my seated heart knock at my ribs,  
 Against the use of nature? Present fears  
 Are less than horrible imaginings.  
 My thought, whose murmur yet is but fantastical,  
 Shakes so my single state of man,  
 That function is smother'd in surmise,  
 And nothing is, but what is not. (I. iii. 130-142)

では、結論を仮定の位置に据えた二分法が見られる。先に引用した Banquo の台詞とは逆の論理から成立していると考えられる。“horrid image”, “horrible imaginings”, “my thought”, “fantastical” といった一連の語が続出し、最後は “nothing is, but what is not” という台詞で締め括られている。Corson は “keenly imaginative temperament of Macbeth plays an important part in his murderous career” と指摘し、Henri Fluchère は “In his aside... we see the whole of Macbeth... burning with desire to anticipate the future, and perceiving all the possibilities in a flash” と述べている。Macbeth にとっては imagination が現実<sup>2</sup>に先行し、行為を作り出している。現在自分の周囲にあるものは何ら実在感を持っておらず、現実でないもののみが現実として把握されている。reality と unreality を混同している Macbeth の姿がこの台詞には見られる<sup>4</sup>。この行が傍白の最後に位置している事、凝縮され、抽象的で漠然とした表現をとっている事に注意する必要がある。更にこの傍白を特徴づけているのは、体が imagination に付いて行く事ができず分裂している事実である。こういう傍白を述べている Macbeth の状態は “rapt (I. iii. 143)”, あるいは、

New honours come upon him,  
 Like our strange garments, cleave not to their mould,  
 But with the aid of use. (I. iii. 145-147)

と Banquo によって評されている。後者は今与えられたばかりの Cawdor の領主という現状に適應できない Macbeth を表現している。最初の注目すべき傍白から導き出せるのは、空虚

を感じる現実から脱出し、imaginationの世界において自己の存在を確認しようとする Macbeth 像である。

第一傍白に現われた“horrid image”は Malcolm が the Prince of Cumberland に指名された時点において具体化するのであるが、明確に言語化されるのではない。

Let not light see my black and deep desires;  
The eye wink at the hand; yet let that be,  
Which the eye fears, when it is done, to see. (I. iv. 51-53)

Macbeth の内面において“horrid image”が際限なく膨脹して行くのであって、しかも漠然とした言葉によって表現されている。Macbeth は現時点を跳び越えて、imaginationの中で Duncan 暗殺を想定しているのである。“leaping”, “overleap”, “vaulting”, “jump” という語の反復強調は Macbeth の台詞の特徴の一つである<sup>5</sup>。しかも、それらは傍白と独白に現われている。更にここでも目と手の不統一が繰り返されている<sup>6</sup>。

Duncan の Macbeth 居城訪問を歓迎する宴会から脱け出した Macbeth は次の独白を吐く。

If it were done, when 'tis done, then 'twere well  
It were done quickly: if th' assassination  
Could trammel up the consequence, and catch  
With his surcease success; that but this blow  
Might be the be-all and the end-all—here,  
But here, upon this bank and shoal of time,  
We'd jump the life to come.—But in these cases,  
We still have judgment here; that we but teach  
Bloody instructions, which, being taught, return  
To plague th' inventor: this even-handed Justice  
Commends th' ingredience of our poison'd chalice  
To our own lips. He's here in double trust:  
First, as I am his kinsman and his subject,  
Strong both against the deed; then, as his host,  
Who should against his murderer shut the door,  
Not bear the knife myself. Besides, this Duncan  
Hath borne his faculties so meek, hath been  
So clear in his great office, that his virtues  
Will plead like angels, trumpet-tongu'd, against  
The deep damnation of his taking-off;  
And Pity, like a naked new-born babe,  
Striding the blast, or heaven's Cherubins, hors'd

Upon the sightless couriers of the air,  
 Shall blow the horrid deed in every eye,  
 That tears shall drown the wind.—I have no spur  
 To prick the sides of my intent, but only  
 Vaulting ambition, which o'erleaps itself  
 And falls on th' other—

(I vii. 1-28)

Duncan 暗殺決行を今夜に控えて、暗殺そのものが問題ではなく、“the life to come”へと Macbeth の心は飛躍して行くのである。この独白は二つの部分に分かれ、各々が表現上の異なった特徴を持っている。暗殺について述べる前半、即ち、1—7行では積義困難な短い節、受動態、仮定法から構成され、抽象的な用語が顕著である。1—2行を Robert Speaight は忌わしい事であり、そこから一気に逃げ出すかのように、非常に早口で言っている。後半との連結部分にあたる8—12行は、前半よりも具体的な表現になっているものの、“we”を使用した一般論である。予期される罰を述べた後半は具体的な image の連続となる。これまで我々は Macbeth の傍白において imagination の上での暗殺決行が漠然とした表現をとっているのを見てきたわけであるが、“assassination”という語が初めて現われるこの独白においてすら、暗殺後への関心—しかも、王冠とそれに付随する名誉や諸々の権力ではなくて、もう一步先の時点、即ち、不法な王位略奪の結果当然生じる復讐の勢—が具体的な言葉となって独白の大部分を占めている事実は注目に価する。

こういう Macbeth の心の流れは Duncan の寝所へ忍び寄る際の台詞に引き継がれる。

Is this a dagger, which I see before me,  
 The handle toward my hand? Come, let me clutch thee:—  
 I have thee not, and yet I see thee still.  
 Art thou not, fatal vision, sensible  
 To feeling, as to sight? or art thou but  
 A dagger of the mind, a false creation,  
 Proceeding from the heat-oppressed brain?  
 I see thee yet, in form as palpable  
 As this which now I draw.  
 Thou marshall'st me the way that I was going;  
 And such an instrument I was to use.—  
 Mine eyes are made the fools o' th' other senses,  
 Or else worth all the rest: I see thee still;  
 And on thy blade, and dudgeon, gouts of blood,  
 Which was not so before.—There's no such thing.  
 It is the bloody business which informs  
 Thus to mine eyes.—Now o'er the one half-world

Nature seems dead, and wicked dreams abuse  
 The curtan'd sleep: Witchcraft celebrates  
 Pale Hecate's off'rings; and wither'd Murther,  
 Alarum'd by his sentinel, the wolf,  
 Whose howl's his watch, thus with his stealthy pace,  
 With Tarquin's ravishing strides, towards his design  
 Moves like a ghost. —Thou sure and firm-set earth,  
 Hear not my steps, which way they walk, for fear  
 Thy very stones prate of my where-about,  
 And take the present horror from the time,  
 Which now suits with it. —Whiles I threat, he lives:  
 Words to the heat of deeds too cold breath gvies. (II. i. 31-61)

夢遊状態にある Macbeth の目前には彼が望んでいる王位の象徴としての王冠ではなくて、幻の短剣が現われ、僅か12行後に血のついた短剣となる。手段としての短剣から結果としての短剣へのこの変化は Macbeth が imagination の中で Duncan を暗殺した事を語っている。魔力による幻覚と解釈するよりも、Macbeth の飛躍する imagination を示していると考えの方が妥当であろう。そして、この12行の間に述べられている事は、またしても目と手の分裂である。この不統一の意味するところは、暗殺行為という現状況の中に自己の存在を確認し得ないでいる Macbeth を示している。従って、彼は Duncan 暗殺に向う自己が全く他人に思われてくる。Kenneth Muir はこういった Macbeth の状態を 'queer state of objectivity'<sup>9</sup> と称している。Lady Macbeth が鳴らす鐘の音に促されて我に戻った Macbeth の台詞

I go, and it is done: the bell invites me. (II. i. 62)

には全身の力をこめて Duncan 暗殺に進む様子は感じられない。接続詞 "and" の次に具体的には 'assassination' を意味する "it" を主語とする受動態が続く事実には注意しなければならない。Macbeth にとって "go" とは 'assassination' を含めた一つの状況の終了を意味するのである。

獲得した王位は Macbeth に何の喜びも与えず、彼の現状脱出志向は Duncan 暗殺後一層強くなる。魔女の予言によれば Banquo の子孫のものになるという王位を彼の子孫の手に確保できる状態を作り出さなければならない。そこで彼の思考は子孫の代へと飛躍する。現状においては Macbeth の Duncan 暗殺行為は意味を持たず、自己を確認し得る拠所となるものではない。

To be thus is nothing, but to safely thus: (III. i. 47)

前出の独白同様、現在の状況を示す “thus” が具体的な名詞、‘a king’ にとって代っており、具体的表現は未来への言及箇所に見られる。

## 二

傍白、独白において顕著に現われた Macbeth の現状脱出志向は Lady Macbeth には見られない。

Thy letters have transported me beyond  
This ignorant present, and I feel now  
The future in the instant. (I. v. 56-58)

は Macbeth の傾向と似ているようであるが、彼女にとって ‘future’ とは王妃の位を意味しており、彼女の行動も思考も Duncan 暗殺を中心に繰り広げられるにとどまる。Macbeth は

why do you keep alone,  
Of sorriest fancies your companions making,  
Using those thoughts, which should indeed have died  
With them they think on? (III. ii. 8-11)

と Lady Macbeth にはうつる。Lady Macbeth と著しい対照をなす Macbeth の思考形態は傍白、独白以外の場面においても種々の表現をとって現われる。Macbeth が Rosse からの報告を受けて言う

why do you dress me  
In borrow'd robes? (I. iii. 108-109)

その結果、魔女の予言の一つが実現した事に茫然自失状態に陥っている Macbeth を評して Banquo が述べる

New honours come upon him,  
Like our strange garments, cleave not to their mould,  
But with the aid of use. (I. iv. 145-147)

に見られる「借着」の image はこの劇の重要な image の一つであり、現状に信頼をおくことができない不安定な Macbeth の様を表現している。従って、謎めいた予言を残して魔女が消えようとする時、Banquo が持ちあわせない異常な探究心を Macbeth は示す。

Macbeth の現状を拒否する態度は、Duncan 暗殺のために絶好の時と場所が準備された際、暗殺行為に自己没入できず、Lady Macbeth の強い非難を受けることになる。Macbeth には暗殺の失敗という起り得るかも知れない未来の状況が問題なのである。

Jan Kott は *Macbeth* の主題を殺人に求め、Richard 三世が他人に命令を下して殺人を犯すのに対して、Macbeth は自らの手を汚さなければならないという相違点に着目しているが<sup>11</sup>、‘blood’ を重要 image の一つとしている血塗られた劇 *Macbeth* において注意を払わなければならないもう一つの事実がある。それは中心事件である Duncan 暗殺が直接観客の目に触れない高舞台奥で行なわれ、暗殺前後に重点が置かれている点である。この舞台展開方法の解釈が *Macbeth* の思考の内部構造を解く鍵になると考えられる。暗殺の間、及び直後の Macbeth の台詞には疑問文が頻繁に現われる。例えば

Who's there?—what, ho! (II. ii. 8)

は、Duncan を殺害しようとする時、物音が聞えたように思い注意を外に逸らす Macbeth の台詞である。暗殺行為の際に手と耳が分裂し、想像上の音に怯える Macbeth とは反対に、Lady Macbeth は “the owl”, “the crickets” の鳴き声を楽しんでいる。しかも、Macbeth は自分の叫び声に全く覚えのない事が後に判明する。この場面における音に関して Macbeth と Lady Macbeth が示す反応の相違は “knocking at the south entry” の際に一層明確になり、Duncan の血に染まった手を見て言う両者の台詞に対応する。Macbeth が Duncan を殺している事は舞台上の Lady Macbeth の台詞からのみ理解され、観客の注意は対照的な思考形態を示す舞台外の Macbeth と舞台上の Lady Macbeth に二分される。暗殺という現実の中に完全に自己投入できず、不安な状態にある Macbeth をこの間の事情は物語っていると言えよう。

再び前舞台へ現われた Macbeth は王冠を手にはせず、その代り Duncan の部屋に置いてくるべきであった短剣を持っている。彼の台詞も目的を遂げ、王位を得た人間のものとは思われない。Lady Macbeth の言葉には少しも応えないで、

I have done the deed.—Didst thou not hear a noise? (II. ii. 14)

から始まり、

This is a sorry sight. (II. ii. 20)

But wherefore could not I pronounce “Amen”?

I had most need of blessing, and “Amen”

Suck in my throat.

(II. ii. 30-32)

自己の行為を後悔せずにはおれないかのように、image が次々湧き出る

Methought, I heard a voice cry, "Sleep no more!  
Macbeth does murth' Sleep,"—the innocent Sleep;  
Sleep, that knits up the ravell'd sleeve of care,  
The death of each day's life, sore labour's bath,  
Balm of hurt minds, great Nature's second course,  
Chief nourisher in life's feast;—

. . . . .

Still it cried, "Sleep no more!" to all the house:  
"Glamis hath murth' Sleep, and therefore Cawdor  
Shall sleep no more, Macbeth shall sleep no more!"

(II. ii. 34-42)

I am afraid to think what I have done;  
Look on't again I dare not.

(II. 50-51)

What hands are here? Ha! they pluck out mine eyes.  
Will all great Neptune's ocean wash this blood  
Clean from my hand? No, this my hand will rather  
The multitudinous seas incarnadine,  
Making the green one red.

(II. ii. 58-62)

へと続く。彼は手から血を洗い落したり、夜着を身につける事によって発覚を逃れるなどは考えも及ばない。国王暗殺という自然の秩序に関する行為においてさえ、完全な自己の存在を認識できなかったという認識とそこから生じる悔恨の念のみが増大してくる。

To know my deed, 'twere best not know myself.

(II. ii. 72)

を Una Ellis-Fermor は "If I am to live on terms with this deed, I must break with my real—my former—self."<sup>11</sup> と解釈している。自分ではなく、誰か他人が Duncan を暗殺したように思われてくる。

暗殺された Duncan の姿が発見された時、彼が言う

Had I but died an hour before this chance,  
I had liv'd a blessed time; for, from this instant,  
There's nothing serious in mortality;  
All is but toys: renown, and grace, is dead;



The wine of life is drawn, and the mere lees  
Is left this vault to brag of. (II. iii. 91-96)

は、欺瞞のための台詞であると同時に彼の本心を吐露したものであると一般に解釈されている。自らの手で殺しておきながら、Duncan への羨望は強くなるばかりである。

Better be with the dead,  
Whom we, to gain our peace, have sent to peace,  
Than on the torture of the mind to lie  
In restless ecstasy. Duncan is in his grave;  
After life's fitful fever he sleeps well;  
Treason has done his worst: nor steel, nor poison,  
Malice domestic, foreign levy, nothing  
Can touch him further! (III. ii. 19-26)

第一 Folio 以外では “peace” は ‘place’ となっているが、自己を見い出すために欲する王位を手に入れながら、心の安定を得る事ができないでいる Macbeth を表現するには “peace” が適当であろう。Duncan 暗殺直後に聞かれた宇宙的な規模の台詞は、既に反秩序の行為を犯したにかかわらず、自己の安心が達成されないならば、宇宙の破滅をも辞さないまでに発展し、魔女と二度目に会う場面において言う、

I conjure you, by that which you profess,  
Howe'er you come to know it, answer me:  
Though you untie the winds, and let them fight  
Against the Churches; though the yesty waves  
Confound and swallow navigation up;  
Though bladed corn be lodg'd, and trees blown down;  
Though castles topple on their warders' heads;  
Though palaces, and pyramids, do slope  
Their heads to their foundations; though the treasure  
Of Nature's germens tumble all together,  
Even till destruction sicken, answer me  
To what I ask you. (IV. i. 50-61)

では、未来を確実に知りたいとする願望を現わしている最初の “conjure you” と最後の “answer me” の間に、変奏を見せながら自分の未来を知る条件として宇宙の破滅を持ち出している。現状に安心を得られないでいる自己の置かれた状態を “Cabin'd, cribb'd, confin'd, bound (III. iv. 23)” といった一連の「閉じ込める」言葉によって表現している。未来を知

る事を渴望する Macbeth にとって、たとえ自己破滅の道が示されても躊躇しない。

for now I am bent to know,  
By the worst means, the worst. (III. iv. 133-134)

*Macbeth* におけるもう一つの暗殺場面を見てみよう。Banquo とその息子 Fleance を殺すために Macbeth は最初二人の暗殺者を雇ったのであるが、ここにはもう一人の暗殺者が加わる。この三人目の人物については、Macbeth から派遣された spy, Macbeth の家来, Rosse, Macbeth 自身とする説に分かれているが、いずれの解釈を採るとしても、重要な点は心の安定を得ようとして自分が選んだ現実には確信が持てない Macbeth がこの三人目の暗殺者の登場から感じられる事である。

種本にはない Banquo の亡霊出現に見られる *imagination* 過多の傾向、換言すれば、現実を先取りする *imagintaion* の持ち主である Macbeth は大団円において復讐戦を挑む Malcolm の軍勢に城を包囲された時も “report” は持って来なくても良いと部下に伝える。即ち、現状認識を拒否するのである。戦況がいかにも不利であろうとも、一見現実に起り得ないと考えられる魔女の予言を彼は信じる。しかし、現実を脱出するための行為を積み重ねるほど現実脱出傾向が強くなり、*imagination* に先導される Macbeth にとって結末は一大 *irony* になる。即ち、動かないはずの Birnam の森は動き、存在しないはずの女の腹から生まれない男 Macduff が出現するに及んで、Macbeth は見事裏切られるのである。

これより少し前、Lady Macbeth の死が報告された時、Macbeth はその死亡の様子や原因を問う事はせず、一見独白とも思われるような一般論を観照的態度で述べる。死は当時の人々を強くとらえていた関心事であるが、Duncan 暗殺の共同行為者であった Lady Macbeth の死という現実の具体的状況は Macbeth にとって問題ではない。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,  
Creeps in this petty pace from day to day,  
To the last syllable of recorded time;  
And all our yesterdays have lighted fools  
The way to dusty death. Out, out, brief candle!  
Life's but a walking shadow; a poor player,  
That struts and frets his hour upon the stage,  
And then is heard no more: it is a tale  
Told by an idiot, full of sound and fury,  
Signifying nothing. (V. v. 19-28)

‘time’ への言及が前半を占めており、‘time’ を表現する他のいかなる言葉でもなくて、

“tomorrow” が三回繰り返されている点に注意を要する。ここでは、Macbeth が一貫して見せてきた未来志向が “tomorrow” という語に圧縮されていると考えられる。そして、未来が何の意味をなさないまま直ぐ過去へと変化してしまふ様を三つの “tomorrow” から ‘all our yesterdays’ という圧縮した表現への変化の中に読み取る事ができる。現状の中に完全な自己を見出し得ず、未来の中に自己の確立を試みようとした Macbeth が初めてこれまでの過程を顧みたこの台詞は、第一傍白に現われた ‘play’ を後半の主要な image として展開している。魔女の予言の一つが実現した事を

As happy prologues to the swelling act  
Of the imperial theme.

(I. iii. 128-129)

と考へて、現実から遊離した世界の中へ自らを駆りたてた Macbeth はそういう自分が無意味で空虚なものであったと認識するに至る。「明確な内容や観念を言語という手段により、又比喩という例証法的方法によって現わすというのではなく、比喩そのものの作用によって、内容や観念が明確に形成される<sup>12</sup>」という特徴を持ち、‘time’ と ‘play’ を基軸の image に据えたこの台詞は、現実脱出と imagination の先行という Macbeth の思考形態を考える時、一層意味を増すと考へられる。

## 結

Macbeth の劇展開上の論理性の欠如、及び速さは、一つには主人公 Macbeth の第一独白の締括の台詞、“nothing is, out what is not (I. iii. 142)” に象徴的に凝縮表現されている現実脱出と旺盛な imagination の先行という内面構造に基づくものであると言えよう。そういう特徴を持つ Macbeth が Elizabeth 朝の人間にとって自然の転倒を意味する根源的な行動一国王暗殺一を敢行したところに悲劇の原因がある。いわゆる「悪人」でありながら Macbeth が悲劇の主人公たり得る理由は、自己実現をはかろうとして imagination に先導されて一つの行為から次の行為へと進むが果せず、自己の存在の無意味を認識せざるを得ない点にあると考へられる。Macbeth の台詞における imagination は従来から注目されているが、“His imagination is... the best of him, something usually deeper and higher than his conscious thoughts; and if he had obeyed it he would have been safe.”<sup>13</sup> と解釈するよりは、むしろ、時間的に未来へと飛躍脱出する Macbeth の思考形態の本質を特徴づけ、彼の悲劇を作り出す一因となっていると考へられる。

## 註

1 山本忠雄「シェイクスピアの言語と表現」(東京, 1967), p. 13.

2 *A New Variorum Edition of Shakespeare Macbeth*, ed. Horace Howard Furness.

- Jr. (New York, 1963), p. 53 (Notes).
- 3 *Shakespeare*, trans. Guy Hamilton (London, 1964), p. 231.
  - 4 G. W. Knight, *The Wheel of Fire* (London, 1970), p. 153.
  - 5 B. Ifor Evans, *The Language of Shakespeare's Plays* (London, 1965), p. 162.
  - 6 "Introduction," *The Arden Edition of the Works of William Shakespeare Macbeth*, ed. Kenneth Muir (London, 1968), pp. xxix-xxx.
  - 7 *Selected Passages from Shakespeare*, rec. Robert Speaight, notes and trans. Kunihiko Imai (Tokyo, 1964).
  - 8 W. C. Curry, *Shakespeare's Philosophical Patterns* (Massachusetts, 1968), p. 84.
  - 9 *ibid.* p. 52.
  - 10 「シェイクスピアはわれらの同時代人」訳 蜂谷昭雄, 喜志哲雄 (東京, 1968), pp. 90—91.
  - 11 Kenneth Muir.
  - 12 A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1963), p. 295.
  - 13 山本忠雄, p. 14.